

盛岡三高の参加型授業所感①

期 日 平成 25 年 1 月 30 日 (水)

学 年 2 学年

科 目 現代文 「こころ」

授業者 教諭 寒河江佳緒理

● 生徒への情報の伝え方

授業で行う教師の言動には「説明」「発問」「指示」「助言」「応答」「受容」「評価」「叱責」「賞賛」など多数あげることができる。

特にその中で、「説明」「指示」「発問」は教師の指導言と呼ばれている。

寒河江教諭は適切な指導言によって、生徒を学びの場へと導いている。

具体的なポイントを以下に述べる。

- ① 発する言葉がクリアであり、間の取り方も良い。
また、抽象的な表現をできるだけ避け、わかりやすい説明を心掛けている。
生徒を和ませる「くすぐり」も絶妙。
- ② 一つの指導言に一つの指示内容を原則としている。
- ③ 教師がしゃべりすぎず、生徒の学習活動を支援するという立ち位置で指導している。

寒河江教諭に聞いたところ、かつて勤務した高校で、支援を要する生徒への対応を経験したことから、指導言についてより注意を払うようになったとのことである。

我々は、教科内容の教材研究だけではなく、時には「コーチング」的視点に立って、情報の伝え方、生徒の目標達成への支援の仕方についても研究する必要もあろう。そのような意味でも、寒河江教諭の授業は非常に参考になる。



● 思考と表現を循環させる集団指導

本時は、グループ学習により、生徒どうしの話し合いや、生徒が表現する場面を多く取り入れた授業であった。

最近は、「言語活動の充実」との謳い文句が先行し、ややもすれば、一斉朗読や、ルーティンワーク的な「ペアで説明しあう活動」、クイズ番組のようにワンセンテンスで答えられる発問の繰り返し・・・などをもって言語活動と称している授業も未だに数多くみられる。

今回の学習指導要領改訂の中での大きな目玉として、評価の観点が次のように変わったことがあげられる。

<旧課程>

- 1 関心・意欲・態度
- 2 思考・判断
- 3 技能 (処理)・表現
- 4 知識・理解

<新課程>

- 1 関心・意欲・態度
- 2 思考・判断・表現
- 3 技能
- 4 知識・理解

「表現」の観点が、思考・判断と一体化された。その意図は、従来の「プレゼンテーション能力」的な表現力を評価するのではなく、表現により、思考を評価すること、いわば思考の言語化という意味で「表現」が捉えられているということだ。

穿った見方かもしれないが、このような背景には、例えば、「音楽理論はわからなくても大きな声で歌っている」とか、「何回も手をあげて積極的に発言している」から評価する、など、「活動ありて学びなし」型の授業が横行していることへの警鐘とも考えられる。

寒河江教諭の授業は、そのような表現のパフォーマンスを競わせるのではなく、表現から思考を探ること、表現させることにより、思考を浮き彫りにすること、などといった、思考と表現を一体的、循環的に捉えて授業を進めているところが見どころである。



● 一人一人の考えを活かす

寒河江教諭の授業は、基本的に、学習者の主体的な活動が軸になっているが、実は彼らの発言を、教師が適切に舵をとってクラス全体へと敷衍し、生徒に課題意識を抱かせている。その結果、深い学びが起き、生徒を高所に導いている。そこに寒河江教諭の教師としての力量と指導力の高さが窺える。

例えば、本時での、生徒の間違いを基に展開していく流れは印象的である。

明らかに誤読していたと思われる発表が、ある班からなされた。通常は、その間違いを指摘し、強引に訂正し授業を進めていくことが多い。

寒河江教諭はそうではなく、なぜそう考えたのか、生徒への発問を繰り返しながら、その論拠を言語化させる。その中で論点が徐々に明確になり、読解力とは単なる感性や、漠然としたイメージに根ざしているものではないことに生徒は気づいていく。

この過程を、単に、教師とその間違えたグループとの関係ではなく、クラス全体の課題としてとりあげ、掘り下げていくところが重要なポイントである。

否定の否定は肯定ではなく「強い肯定」であるといわれるが、このような誤読の原因を分析する行為を経由することで、より深い理解がなされ、生徒の成就感は増すとと思われる。



● まとめ ～しゃべりすぎないこと～

寒河江教諭は「しゃべりすぎないこと」を自らに課している。これはどの教科にもいえる非常に重要な授業ポリシーである。

我々は、往々にして、次のような2つのタイプの「しゃべりすぎ」の授業を目撃する。

一つは、自分の掌の上からはみ出さないように過剰にコントロールした授業である。そこで行われる「発問」は教師の頭の中にある答えを言わせるだけのものである。早く全員に定着させたいというエクスキューズの下、優先されるのは、教師の都合による指導の効率性と、教えたという事実づくりのために行う教師の過度の説明である。

二つ目は、有名予備校の名物講師よろしく、語り倒す授業である。テンポよくスピーディーに展開されるが、実は一方的に知識と技能を注入していく授業である。進学校の数学でよく見られるが、模試の偏差値を上げたいという生徒と教師の利害の一致によって、かたかも成立している授業といえなくもない。

教育学者の里見実氏は、教師の都合や、効率性だけで行われる授業に対し、次のような辛辣な意見をのべている。

「(略) 一見能率的な知識の注入は、かえって時間を無駄に使い捨てているのである。

僕らが時間を節約し、手際よく、教科書のすべての知識を生徒たちに伝達したとしよう。生徒達の社会を読む力が、それでいささかなりとも高められるであろうか。回答は教師自身が、誰よりもよく知っている。いや、それは、教師自身の姿において、すでに示されている。

(「学校を非学校化する新しい学びの構図」より)

2013年6月1日 しもまちひさお／盛岡三高